

INVENTING "AMERICA":The Politics of National Symbolism

—アジア太平洋交流センター主催第13回アメリカ研究フォーラムに参加して—

吉 田 かよ子

INVENTING "AMERICA": The Politics of National Symbolism

— A Report on the 13th Annual American Studies Forum —

Kayoko Yoshida

Abstract

The 13th annual American Studies Forum sponsored by the Center for Asia-Pacific Exchange (CAPE) was held at the University of Hawaii from July 27 through August 5, 1993. The theme of the Forum was INVENTING "AMERICA":The Politics of National Symbolism with Prof. Michael Cowan, Professor of American Studies at the Univ. of California at Santa Cruz, as the featured speaker. This report takes the form of a study note based on six lectures given by Prof. Cowan during the 10-day forum.

Prof. Cowan's lectures were based on the thesis that the birth of the United States was accompanied by the creation of a symbolic country called "America." He attempted to examine the major elements of the debates which centered around the United States' relationship to that symbolic country by exploring the historical development of that relationship from political, economic and socio-cultural perspectives.

Prof. Cowan also reviewed how idealized concepts of America and the Americans have affected the ways in which the country and its people relate themselves to its own society and the outside world.

The forum offered numerous incentives to participants from Asia and the Pacific. The goal of the CAPE to highlight the Asia-Pacific aspects of the American experience seemed to be successfully reached through active exchange among participants and lecturers.

一はじめに

アジア太平洋交流センター (the Center for Asia-Pacific Exchange) 主催による第13回アメリカ研究フォーラムは、1993年7月27日から8月5日までハワイ大学を主会場に開催された。

日本からはアメリカ学会より派遣参加の筆者および牛島秀彦東海女子大学教授兩名を含めて3名、韓国からは張前ナサニエル・ホーソン協会会長、金韓国外語大学北米研究所長をはじめ、政治学、法律、文学の専門家や大学院生計17名、他に中国人大学院生1名の合計21名が参加した。

アメリカ側からは、カリフォルニア大学サンタクルーズ校の Prof. Michael Cowan (アメリカ研究、文化史、文化論) を中心に、ハワイ大学アメリカ研究学科の教授陣5名が講師として加わった。

Inventing "America": The Politics of National Symbolism がフォーラムのテーマであり、アメリカ研究への貢献からボード・ピアソン賞を受賞したコーアン教授の講義を軸に、連日充実したセッションが展開され、参加者の意見交換もきわめて活発であった。

アメリカ合衆国建国に伴って誕生した象徴的「アメリカ」と「アメリカ人民」—その理想化された概念を歴史的に解明していくコーアン教授の講義は、時には視覚的イメージをスライドを用いて解説し、またそのシンボルの枠外にとり残された黒人や先住民の視点から捉え、そうしたシンボリズムが米国の対外政策にどのように影響を与えたかの検証に至る幅広いものであり、その緻密で周到な準備は、フォーラム全体の充実が大きく寄与するものであった。

本論は、フォーラム期間中7回にわたって

行われたコーアン教授の連続講義のうちの6回の内容をまとめ、筆者の解釈を加筆した研究ノートである。

I. 序

アメリカ合衆国として知られる法的政治的統合体の誕生および発展は、「アメリカ」と呼ばれる象徴的国家の創生を伴うものであった。実際の合衆国の歴史は、象徴としての「アメリカ」との関係についての永続的な、そしてしばしば熱を帯びた論争によって大きく影響を受け続けてきた。

この連続講義では、こうした論争の主要な要素を検証し、国の内外からの多様な政治的、経済的そして社会的影響に呼応した論争の持続性および変化に注目していく。

理想化された概念としての「アメリカ」と「アメリカ人民」が、合衆国の政治的社会的慣行の擁護や反撃にどのように用いられてきたか、また、そのような「アメリカ」の概念そのものが、世界の中の合衆国の適切な役割についてのアメリカ人そのものの思考能力を制限しているのではないかという問いも検証していく。

II. 「象徴としてのアメリカ」の誕生

“What then is the American, this new man?”

J. Hector St. John de Crevecoeur, 1782

1992年のコロンブス新大陸上陸500周年は、南北アメリカ大陸への欧州人の定住が単なる人的移動だけではなく、欧州人の想像する「新世界」に対する思想の押し付けでもあったことを改めて想起させるきっかけとなった。

アメリカの名称は、1507年にドイツの地理学者アメリゴ・ベスプッチにちなんで命名されたものだが、それが現実となる以前に思想 (idea) であったことを忘れてはならない。17世後半には、欧州人の間では「アメリカズ」は南北アメリカ大陸を意味し、「アメリカ」は北アメリカ大陸を指すことが定着した。「アメリカ」は、18世紀になるとその中でも英国による植民地を意味する言葉に変わっていく。

17世紀には自らをイングリッシュ・コロニストと称していたジェームスタウンやマサチューセッツ植民者たちは、1740-1750年頃にはイングリッシュ・アメリカンと称して、アメリカ植民地に生きる誇りとアイデンティティを表現するようになる。

独立宣言当時において、なお自分たちを英国人とみなしていた彼らは、1783年のアメリカ合衆国独立という植民地革命の最初の勝利に際して、その行動を正当化する意味でも、アメリカおよびアメリカ人の独自性を強調する必要に駆られた。ジョージ・ワシントンの離任演説でも、単なる政治的統合を超越した神聖な絆の存在が強調されたのも、それが合衆国の誕生に必要な欠くべからざるものだったからなのである。

このようにして、「アメリカ」および「アメリカ人」を形成する多くの理念や理想が一体となっていく。逆に言えば、合衆国の未来に賭した理念、理想の集大成の代役 (stand in) として「アメリカ」は誕生したのである。

「アメリカ」が代表する理念・理想の主なもの、(1) 新しさ (Newness)、(2) (進歩発展に結びつく) 未来 (Future)、(3) 自由 (Liberty)、(4) 平等 (Equality)、(5) 共同体 (Community)、である。

中でも、共同体の理念は初期のピューリタン間のヒエラルキーを持つものから、19世

紀には愛の絆によって結びつく平等な共同体へと変質していくこととなる。

(1)-(5) の理想は、1830年代にアレクシス・ド・トクヴィルが共和国としての合衆国を支える体制としての民主主義のあり方を著した時にも、その骨子として用いられている。

「アメリカ」の体現する、国家としての理想を広く世界に知らしめることが、深い宗教的信念に支えられた使命である、とする思想が、その後のアメリカの対外政策に大きく影響したことは論を待たない。

こうした合衆国の政治的独立を正当化するための、いわば理論武装としての「アメリカ」は、同時に視覚的に有効なシンボル作りを伴うものであった。

— 「アメリカ」の視覚的シンボル —

古代ローマのシンボルであった鷲が、合衆国のシンボルとしてよみがえった。アメリカ国旗は、国家としてのアメリカの公式の表象となった。また、独立宣言および合衆国憲法が国家の宝物 (sacred object) の役割を担った。

建国の父祖であるベンジャミン・フランクリンやトマス・ジェファーソンは、「アメリカ人」を代表する象徴的イコンとして用いられた。ワシントンとリンカーンは、それぞれオベリスクとメモリアルとして、ワシントン D. C. にそびえ、プロテスタント国における現世の聖者と殉教者として奉じられている。このように大統領は聖徒の列に加えられ、ホワイトハウスは聖地となり、ワシントン D. C. はいわば合衆国のイコンの博物館の役割を果たしている。

Ⅲ. 19世紀の「アメリカ(人)」像の追求

19世紀に入ると、法治国家としてのアメリカ合衆国の誕生に伴うシンボルの創造とは別に、文化的独立を正当化するアメリカおよびアメリカ人像のイメージが作りあげられた。法律による、または社会的定義によるアメリカ人ではなく、共通の価値を分かち人々として文化的にアメリカおよびアメリカ人を定義しようとする試みである。なかでも強調されたのは、次の三点の主題であった。

(1) 新生国アメリカを、北米大陸の雄大な自然環境の浪漫的理解に伴う価値に結びつけようとする試み、(2) ヨーロッパ出身のアメリカ人が自分たちが排除しようとしているネイティブ先住民族と自らを関連づけることによって自分たちこそがこの大陸のネイティブであることを印象づけようとする試み、それに(3) “るつぼ (melting-pot)” イメージの先行ともいえる、民主主義のエトスのもとに集まった多様な背景の人々によって創りだされた新しい人間 (new people) としてのアメリカ人を確立しようとする試み、である。

ー自然賛美とテクノロジーとの調和ー

19世紀のアメリカ絵画に描かれる北米の自然景観や荒野は、そのスケール感やボリュームを強調したものが多い。最も好まれたナイアガラの滝や、バージニアのナチュラルブリッジ、プライス国立公園などの題材に、アメリカのエッセンスを代表させているのである。しかし、こうした自然賛美は、実際にはそうした壮大な景観に生きるアメリカ人そのものを賛美したものにほかならなかった。

アメリカでは、自然は人間のための資源にすぎず、1783年から1853年のわずか70年の間

に一気に領土拡大をもたらした西進運動は、アメリカ人の神聖なる企てとみなされた。そのような思想風土のもとでは、自然を切り開くテクノロジーも同時に賛美の対象となり、特に鉄道は19世紀アメリカで最も賛美されたイメージとなった。

1840年代にメキシコ北部に侵略する際に唱えられ、その後の西進運動の原動力となった manifest destiny は、テクノロジーと自然の調和という神話にも支えられた、集団的貪欲と集団的想像力の所産であった。

ーネイティヴとしての「アメリカ人」ー

18世紀にクレヴクールが「ヨーロッパから根こそぎにされ、新しい大地に移植された植木が、アメリカ人という新しい人種となった」と定義した、ヨーロッパ各地からの人々の混合体は“るつぼ”を通過することによって、アングロアメリカニズムの絆で統合されるというのが、19世紀アメリカの定説であった。

1835年に Democracy in America の第一部を出版したアレクシス・ド・トクヴィルも、その本の中で、アングロアメリカ人とアメリカ人を同義に用いている。また、ハーマン・メルヴィルは、19世紀中葉に、アメリカ人こそが人類の救世主であり、アメリカは国ではなく、一つの世界として存在すると述べている。

このようなヨーロッパ系アメリカ人は、異なる背景を持つ人々—特に先住民族であるアメリカ・インディアン—をどのようにみていたのだろうか。

コロンブスの新大陸発見時には、100万から1,000万人の規模で北米に居住していたと見なされるインディアンは、1890年代には25万人に激減した。病気、南部における奴隷化、ヨーロッパ系社会への同化、集団自殺等の原因による先住民族人口の減少は、彼らの領土

の大幅な喪失を意味するものでもあった。

1830年のインディアン排除法による強制移動に代表されるような、manifest destinyの名分のもとに行われたおびただしい数のインディアンの排除を正当化するためには、それ相応のイメージ作りが必要となった。

ニューイングランドでは、植民地建設の当初から、自然はウィルダネス、すなわち邪悪であり、その地に住むインディアンは悪魔の使いである野蛮人であると見なしていた。インディアンは高貴な野蛮人 (noble savage) のイメージの中に押し込められていたのである。しかしひとたび、彼らが植民者たちに経済的脅威を与えないとわかると、ヨーロッパ人たちは自らを新大陸のネイティブであると想像しはじめた。革命の発端となったボストン茶会事件の際、ヨーロッパからの植民者がインディアンの衣装を身にまとっていたことは、きわめて象徴的である。18世紀中葉に盛んに用いられた、アメリカを代表するイメージとしてのインディアン・プリンセスは、いわばインディアンのシンボリックな変貌を具現化しており、インディアンの最良の資質とヨーロッパ人の最良の資質の混合を象徴するものであった。このようにして、新生アメリカ人はその国土のネイティブとしての存在の正当性をアピールしたのである。

IV. 「アメリカ人」の枠外に置かれた人々

“What Country Have I? I Have No Country.”

Frederick Douglass, 1839

19世紀の「アメリカ人」の文化的定義がきわめて広範囲な人々を許容するとすれば、同時にそれは合衆国の領土内で、その政治的権

力のもとに生きる多くの人々を排除し、また周辺化するものであった。ここでは、アメリカ黒人と女性に焦点をあてることとする。

—アメリカにおける黒人—

アメリカにおける黒人を語るのに、人種差別主義のイデオロギーに立脚した制度化、理論化の歴史抜きには語れない。

1619年にジェームスタウンに最初の奴隷が到着して以来、1650年から1750年の間、アメリカ植民地においては生涯奴隷制度、すなわち生まれながらの奴隷制度が合法化されていた。これは他のヨーロッパ諸国から新大陸に渡った多くの年季奉公者たちと根本的に異なる場所であった。

1750年には、南部においては白人30万人に対して、黒人奴隷の数は20万人にのぼった。1793年にエリ・ホイットニーが綿織機を発明して以来、黒人の売買は南部の地域経済の重要な部分を占めるようになり、南北戦争直前の1860年には、南部の奴隷数は230万人で、地域全体の人口の三分の一に達した。

北部の植民地においては、徐々に奴隷制廃止が進み、合衆国独立後の1808年には、北部への奴隷の移入が禁止された。1827年には最初の黒人新聞 The Liberator の発刊、1831年にはアメリカ奴隷制度禁止協会の発足、1833年黒人や女性の入学を許可するオベリン大学の創立、1839年自由党の立党、と奴隷解放の動きは加速し、1850年のミズーリ妥協の決裂によって、南部との亀裂は決定的となった。

ここで注目すべきことは、1820年代から1830年代にかけて、「アメリカ」そのもののイメージが形成されつつある時に、「南部は独自の生活様式である (distinctive way of life)」という、地域のイメージが同時に形成されたことである。

1830年代においては、南部人は自分たちをアメリカ人と見なすことはなく、常に南部人（Southerners）と自負していた。南部は文化と余暇の世界であり、その理想とするところは、ギリシャ的民主主義—奴隷を基礎とする白人による民主主義—に他ならなかった。白人を頂点とするヒエラルキー社会は、南部が描いた架空の完璧な社会であり、その後、数十年の間に南北戦争の敗戦によってその理想郷はついでさっていくこととなる。

しかし、再建時代に入っても、人種差別主義は消え去ることはなかった。その象徴的なイメージとして挙げられるのが、ニューヨーク市の自然史博物館の正面に建つセオドア・ルーズベルト大統領の彫像である。アメリカ市民となったものは、その出身のいかんに関わらず、すべてハイフン付きのアメリカ人なのだと宣言した、ルーズベルト大統領はこの像では、両脇に黒人とインディアンを従えている。しかし、この三者が主従の関係にあることを意図して製作されたことを疑うものはいないだろう。ウィリアム・ペンの時代から、19世紀後半のジム・クラウ法に至るまで、アメリカにおいては、黒人は全く異なった人種であり、たとえ法のもとでの平等が認められても、白人とは隔離された存在であった。

—女性に象徴されるアメリカ—

植民地時代から、女性はアメリカのイメージの形成に重要な役割を果たした。前述のように、18世紀のブリティッシュ・コロニーにおいては、インディアン・プリンセスが新生合衆国のシンボルであった。

革命時には、自由の象徴としての女性コロンビアが戦うアメリカの士気を鼓舞した。すなわち自由のイメージは女性のイメージに重なり合うものだったのである。

19世紀に入ると、戦う女性のイメージはもとの静かな女性にとってかわられた。新大陸の雄大な自然との関わりの中に女性は登場するようになったのである。大陸の勇猛な自然の調停者としての女性のイメージは、人間に従属する存在としての自然—しいては家庭のシンボルとなり、それは結果として、19世紀の家庭第一主義のイデオロギーを女性に押しつけることとなった。

家庭第一主義のイデオロギーは社会における男女の領域論に裏打ちされたものであった。すなわち男性の領域は政治的、対外的なところであり、女性の領域は家庭にあり、女性の役割は、家庭内で育児をし、道徳観を養い、夫を助けることである、とするものであった。現実には農業従事者の間ではこうした役割分担が厳密に守られることはないにもかかわらず、ヴィクトリア朝のこうした道徳律は女性の行動や意識を縛り続けることとなった。

南北戦争以前には、オベリン大学以外には、高等教育機関の門戸は女性には開放されず、戦争終結後の1870年代、80年代になってはじめて女子大学がアメリカに誕生した。これらの大学卒業生が出るまでは、女性の公の行動は、道徳的改革、禁酒運動、刑務所改善運動、奴隷解放運動等の道徳に関するものに限定されていた。

19世紀後半になると、これら高等教育を受けた女性たちが積極的に社会変革運動に携わるようになり、全米女性選挙権要求協会の結成につながっていく。1870年の憲法修正第15条にも盛り込まれなかった女性の選挙権要求運動は、まさに女性にとってアメリカの制度へのアクセスを手に入れるためのシンボリックな動きであった。

しかし、この婦人参政権運動は、全米的支持を得るには至らず、第一次世界大戦を期に

起こった平和運動と手を携える形で、1920年になってようやく実現されることになる。

1850年には、アメリカの総労働人口の25%は既に女性であった。(この数字には黒人奴隷の女性は含まれない。) その多くは労働者階級と移民の女性であった。その後の合衆国の急速な工業化、都市化は、さらに多くの移民の女性を労働人口の中に組み込んでいくことになる。こうした社会背景にもかかわらず、次々に開拓の手が入る大陸の自然のイメージと平行して、女性に与えられた家庭第一主義のイデオロギーは、19世紀全体を通してアメリカ女性への強い呪縛となった。

V. 戦争と「アメリカ」の持つ意味

「アメリカ的なもの」や「アメリカ気質」の定義にあたって、合衆国が関与してきた戦争の果たした役割を無視することはできない。

アメリカは平和主義国家で、決して侵略国にはならないという考えは、国内で戦われた主要な二つの戦争、独立戦争と南北戦争の戦いの歴史の解釈の中に顕著である。すなわち、独立戦争はいわば防衛戦であり、南北戦争では南部北部ともに戦争の発端を相手の責任に転嫁する、という具合である。

実際、合衆国建国当初から国は常備軍を持つことに反対であった。徴兵制度が開始されたのは、南北戦争の時からである。しかしアメリカ人の理想とする兵士は、常に市民兵士であった。

—「戦争」と理想のアメリカ人像の形成—

独立戦争勃発の地として知られるマサチューセッツ州コンコードに、独立戦争時に召集に即刻応じた民兵—ミニットマン—の像が建っている。1880年に建てられたこの像は、

かたわらに鋤を置きライフルを手にした普通の人間を讃えたものである。

同様に、第二次世界大戦においても、硫黄島で日本軍を打ち破った米軍の普通の兵士たちが力を合わせて米国国旗をかざそうとする写真の中に、アメリカ人のイメージが凝縮されている。

第一次、第二次大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争の無名戦士の墓は、普通の人間たちの戦いの記録としてのモニュメントであり、そこに顕彰されているのは、神聖なる大義のために殉教した多くの庶民なのである。合衆国国民の自発的参加を促し、民主主義にとって必要な支持を与えたという意味で、戦争は重要な出来事であった。

そうした戦争は同時に、アメリカのシンボリズム形成にも大きな役割を果たしてきたことになる。国家の存亡を賭けた緊急時である戦争は、しばしば回顧の形ではあるが、国家のアイデンティティーを形作ることになったのである。「アメリカ人とは何か」という問いに対して、常に「アメリカ人は——ではない」という不同の否定(negation)のレトリックを好んで用いるアメリカ人は、ここでも、「アメリカ人は目前の敵とは違う」というレトリックで、国民の意気の高揚を図ることができたのである。

戦争は普通のアメリカ国民の愛国心高揚に寄与したと同時に、戦争の英雄はアメリカ人の理想像として崇められるようになった。初代大統領ジョージ・ワシントンも、戦争時においても、戦後独立期の当初においても、「アメリカ人」となった人々の間で最初に喝采を浴びた戦争の英雄であった。ワシントンから、ジャクソン、リンカーン、グラント、アイゼンハワー、ケネディ、そしてブッシュにいたるまで、アメリカ人はいつも戦争の英雄たちに自分たちの指導者像を求めてきたのであ

る。

—戦争と社会変革—

アメリカにおいては、戦争はその建国の理念を再確認する機会となった。戦争を契機に様々な社会変革がもたらされた。戦前には社会の周辺部に押しやられていた人々が、戦後権利を獲得することを米国史は証明している。南北戦争後の黒人奴隷制廃止、第一次大戦後のアメリカ・インディアンの市民権獲得、それに続く婦人参政権の獲得が、それを物語っている。

1812年に作られた合衆国国歌は、戦時の国威高揚に力を発揮し、また神聖なる国家の象徴たる国旗に忠誠を誓うという儀式も第二次大戦時に定着した。合衆国においては戦争はまさに重要な国内の統合にむけての有用なレトリックとしての役割を果たしてきたことになるのである。

戦争のレトリックの有効なことを、政治家が見逃すはずはなく、国内の政治課題をいまだに War on Poverty (貧困撲滅の戦い)、War on Drugs (麻薬との戦い) のように、戦いとして国民に提示し、共鳴を得る手段として用いることがしばしば行われる。

また、アメリカのシンボリズム形成に寄与した芸術家たちも、戦争の凝縮された瞬間を好んで取り上げてきた。国に対する忠誠や、愛国心は戦時に高まるのが、通常だからである。

しかし最近では、ワシントン D. C. に作られたベトナム戦争メモリアルのように、従来の肯定的な解釈一辺倒ではないものも現れるようになった。首都で最も来訪者が多い場所として知られるこのメモリアルは、その二つの壁面が一方はリンカーン記念堂を、もう一方はワシントン記念碑を指し、国家と戦争の曖昧な関係を象徴するかのよう、その地に

存在している。

現在の複雑な世界情勢のもと、アメリカの果たすべき使命とアメリカ人とは何かという国内での論争の中で、犠牲と忠誠のテーマをどのように理解するか、また、英雄的兵士としてのアメリカと平和を維持する者としてのアメリカの複雑な関係をどのように解釈するか、など戦争が意味づけてきたアメリカを、再構築する時期にきていることは明かであろう。

VI. 公民権運動を通して見るアメリカ

1954年のブラウン対教育委員会の最高裁判決で、ウオレン首席判事は、公立の教育機関における黒人の差別教育を憲法違反とする判決を言い渡した。19世紀のジム・クラウ法以来の「分離すれども平等」(separate but equal) の原則は、ここに歴史的転換を迎えることになった。

翌年には、アラバマ州モンゴメリー市の黒人バス乗客逮捕事件をきっかけに、マーティン・ルーサー・キング牧師を中心とする公民権運動が本格化していった。60年代に入ると、各地での座り込み (sit-in) や北部からのフリーダム・ライダーズ (自由を獲得するための乗り込み) など、その運動は拡大し、1963年のワシントン大行進で頂点に達した。

リンカーン大統領による奴隷開放宣言が公布されてから100年目にあたるこの年に、リンカーン記念堂を背にして行われたキング牧師の「私には夢がある」演説は、翌年の公民権法の制定で結実することとなった。

—ブラック・パワー運動の台頭—

黒人に白人と平等な地位を与えようとアメリカ国民に訴えるキング牧師がソフト・ライナー融和派—の代表とすれば、マルコムXら

に代表されるハード・ライン強硬派は、白人との融合ではなく、白人との分離を主張し、革命や報復といった言語を用いて、ブラック・パワー急進派を形成した。

キング牧師の非暴力主義が法的な差別撤廃をもたらしたにも関わらず、都市部に集中していた黒人たちの生活改善は進まず、急進派の訴えに同調して実力行動に出る動きが活発化し、1965年のロスアンジェルス・ワッツ、1967年のデトロイトの大暴動へとエスカレートしていく。1968年4月、キング牧師がテネシー州メンフィスで凶弾に倒れると、ブラック・アクティビズムは、一層力を得ていくことになる。

ブラック・アクティビストたちは、しばしば合衆国における黒人の歴史から言葉を引用した。たとえば、奴隷の身分を脱して自由を獲得したフレデリック・ダグラスの自伝からの引用である "What country have I? I have no country." は、対立、直接対決姿勢を打ち出すアクティビストたちの象徴的言語となった。

これに対して、穏健派のキング牧師は、聖書一たとえば出エジプト記からの「約束の地」引用や、合衆国の公式文書からの言語を用いて、アメリカの共通の理想・理念、象徴主義に訴え、黒人を象徴的「アメリカ」の中に統合しようと試みたのである。

VII. 世界の中の「アメリカ」の変容

国内統合の原動力となったシンボリックな「アメリカ」は、第二次大戦後の世界との関わりの中では大きく変容をせまられることとなった。戦後世界の中で、シンボルとしての「アメリカ」に影響を与えた事柄を列挙してみよう。

(1). 核軍備・テロリズム・環境破壊

一次々と地球規模で起こる環境に対する、また人間に対するホロコースト破壊・虐殺行為—がもたらす影響は、合衆国の外交政策、しいてはアメリカ人の意識を変えていった。

(2) 多くの国における経済の崩壊

—大戦後の多くの国を襲った経済崩壊と合衆国の経済大国としての相対的力関係は、「アメリカとは何か」というアメリカ研究の必要性を高めることにもつながっていった。

(3) 世界経済の拡大

—拡大の一途をたどる世界経済の中で、米国企業は多国籍化し、活発な経済活動と技術革新が緩やかに国内の社会秩序を変容させていった。一番最後に変化の兆しを見せ始めたのが文化である。

(4) 重要性を増したマスメディア

—こうした変化の中でアメリカ人が「アメリカ人とは何か」—アメリカらしさのレトリック、ディスコース—を考える主要な手段となったのが、マスメディアである。ベトナム戦争は、最初のテレビで放映された戦争となったが、画一的な視点であれ、その放映量の多さがアメリカ人の心に影響を与えた。

(5) 新移民の大量流入

—1965年の新しい移民法の制定が、1924年に制定されたジョンソン—リード法にとってかわった時、アメリカはメルティング・ポットによる同化の理論を再評価することをせまられる事態を迎えた。人口の3%を上限とする全体数は不変だが、東半球と西半球に50%ずつ割り当てた新移民法のもとで、アジア系、ラテン・アメリカ系の移民が徐々に増加しはじめた。その総体における構成比の変化は、今や Americanness —アメリカらしさ—の通念に大きな問いを投げかけている。

特に国境を接する州においては、その影響は顕著であり、カリフォルニア州においては、移民とその二世が州人口の25%を占めている

る。特に初等・中等教育機関では、50%以上の生徒が非アングロサクソン系で占められるという、19世紀末の合衆国内の状況に酷似した中で、近年のロスアンジェルス暴動のような人種・民族間の緊張に端を発する社会不安が起りはじめた。世論の大勢は移民者の数の制限を求めはじめているが、これは民族的原因よりはむしろ大量に流入する移民の数の弊害を重視する人々が多いことを示すものであろう。

移民のもたらす社会力学は、合衆国を理解するのにきわめて重要である。投票行動の政治への影響は周知のことであるが、現在では、これら新移民はきわめて脆弱な投票人口であり、経済状況に大きく左右されるのが実情である。また、数が多ければ多いほど、アメリカ社会への同化のペースは鈍化し、文化多元主義が勢いをえる結果となっている。

こうした中で、60年代の公民権運動は、ヒスパニック系アメリカ人、先住民族インディアン、女性、少数民族グループの運動に影響を与え、それらの運動に用いられる言語にも、公民権運動は色濃く反映されている。

(6) 合衆国における貧困の顕在化

—ホームレスがマスメディアに取り上げられることに象徴されるように、アメリカ国内の貧困層の顕在化は、「アメリカ人」のイメージに大きな挑戦を投げかけている。アメリカ人の描く「アメリカ人」は、貧しい家庭背景から出発した中産階級の人間で、一戸建ての家にテレビと1-2台の車を持つ—という存在であり続けている。したがって、彼らは貧しい人々にどのように対処してよいか、計りかねているのである。貧困は非アメリカ的なのだ。貧者は社会の犠牲者なのだろうか。アメリカ人はこの問いに曖昧な答えしか持たない。

貧困層に対するこうした世論の当惑は、ア

メリカ人の生活に直接関わる機関に対する信頼度の低下という現象とも共通するものがあるだろう。平均投票率が全有権者の55%という数字は、アメリカ人は政治が自分たちを代表するものであることを期待していないということを示している。今やアメリカの生活の一部になった感のある世論調査の1991年末に実施されたものに、アメリカ人の組織・機関に対する信頼度を調査したのがある。

結果を見ると、信頼度第一位は軍隊(69%)、続いて教会(55%)、大統領府(50%)、最高裁判所(39%)、公立学校(35%)、新聞(32%)、銀行(30%)、テレビ(20%)、労働組合(22%)そして米国議会(18%)となっている。

議会に対する信頼度18%というのは、合衆国史上最低の数字であり、アメリカ人の現在置かれている立場の不安定さをそのまま表すものである。不安定感は往々にして保守的な傾向に結びつき、不安定な時期にはスケープゴートが求められる。自国の機関に責めを帰したり、日本叩きにはけ口を求めるのは、こうした国民の不安定感のなせることなのである。

第二次大戦後に起こったこうした国内外の現象は、シンボルとしてのアメリカにどのように影響しているのだろうか。

Ⅷ. アメリカン・シンボリズムの存続と未来

メディア操作に長けたレーガン大統領の出現が示すように、メディアは合衆国のイメージに多大な影響力を持つ。広告においても、政治においても、大学においても、メディア作りの専門化が進み、「アメリカ」のイメージの商業化が進んでいる。「アメリカ」は、コカコーラやペプシ、リーバイスジーンズと

同様に、それ自体がマーケット商品化しているのである。「アメリカ」そのものの企業化（corporatization）と言える現象である。それはとりもなおさず、アメリカを帝国主義的メンタリティに結びつけるものでもある。このように、「アメリカ」は自由、平等、正義といった肯定的、前向きの価値を内包する言葉である一方で、傲慢で無知な「醜いアメリカ人」のイメージに代表される否定的な帝国主義の代名詞ともなった。

ーアメリカニズムの二つの枠組みー

多くのアメリカ人は、アメリカニズムを次の二つの枠組みの中で考えようとしている。一つは、グローバリズム／インターナショナルイズムであり、地球社会の中でのアメリカの役割を追求しようとするものであり、もう一つは、アメリカ国内における多文化主義、文化多元主義の容認である。

特に後者は、19世紀に南部が北部や合衆国と全く異なる価値や利益を代表する地域として存在したように、国内に先住民インディアンや、ヒスパニック系、黒人などによる文化ナショナリズムを認めようとする考えである。20世紀初頭にセオドア・ルーズベルト大統領がハイフン付きアメリカニズムを提唱した時には、合衆国に対する忠誠は危急の命題であったが、今や African-American や Asian-American などのハイフンの両側の力関係はきわめて曖昧である。現在では、ハイフンさえ除いて、African American や Asian American と記されることも多く、双方は同等の重みを課せられているかのようにも見える。こうした用語の持つ曖昧性は、実際にはその象徴的機能に起因しているといつてよい。

クレブクルの時代から、さまざまな人種間の婚姻による混血が新しいアメリカ人を作

り上げてきた。時代を経て、現在の多民族間の混血はアメリカ人という言葉ですべてに通用する被いとして用いている。メルティング・ポットーるつぼ一力学そのものが、この流動的なアメリカ社会を表すのに適切かどうか、厳しく問われている。それぞれのサブカルチャーが共存する社会は、むしろカレードスコープであったり、モザイク、サラダボールといった表現がより適切であるという意見もある。

外からは地球主義、内からは文化多元主義の波の中で、「アメリカ」「アメリカ人」の伝統的定義の中から何が存続しうるのか。アメリカは国としてのシンボリズムを持ち続けることは可能なのだろうか。ニューヨーク湾にそびえる自由の女神像をアメリカの歴史の中に照らし合わせながら、その答えを模索しよう。

ーアメリカを代表するシンボルとしての自由の女神像ー

1886年に建立された自由の女神(Statue of Liberty)は、19世紀末に大挙して合衆国に押し寄せたヨーロッパからの移民たちの入国管理施設が置かれたエリス島と併存していたことに、象徴的意味が存在する。女神像は、新移民たちにとって自由と機会を体現するものとなったからである。

第一次大戦の際に発行された、戦争債券(war bond)は Liberty Bond と呼ばれ、自由の女神は初めて政府によって合衆国自体のシンボルとして用いられた。

1950年代になると、女神像のイメージは当時商業文化の中心となったニューヨーク市と関連づけて用いられるようになり、商業文化の国「アメリカ」を代表するアイコンとなった。その後も、女神像はシンボリックな地位のヒエラルキーを象徴し続け、「より高い地位を

追い求めること、すなわち自由の女神が体現するもの」という連想がなされた。

1970年代にはいて、老朽化の目だつ女神像の修復が計画され、当時のクライスラー会長リー・アイアコッカを委員長とする財団が設立された。女神像の修復は「アメリカ」への信頼の回復であるというメッセージはメディアの全面的支持を得て、国民に発信された。1986年7月4日には、修復なった自由の女神の100年祭が大々的に行われたが、レーガン大統領がアメリカの威信回復のためにこのイベントをメディアを通して最大限に演出しきったのは記憶に新しい。

自由の女神は、フォークアートやポピュラーアートの分野でも、常にアメリカの新しい顔を提供し続ける。多元的な価値が交錯する現代アメリカ社会の中で、自由の女神は多くの理念・理想を代表することのできる、いわば時代と共に成長し続ける growing object として存在していると言える。

1965年、ジョンソン大統領は女神の建つリパティール島で、新移民法に署名した。アメリカ人民の構成に対する重大な過失である1924年制定の前法をこの地で修正したのである。ある意味で、アメリカの理想がこうしてシンボル化した形をとっていなければ、アメリカ人個人が最大限に自己を高めようとすることは、困難なのかもしれない。

アメリカ人はこのように、理想主義をシンボル化することによってアメリカ人民 (We the People) の能力に信頼を持ち続けることを可能にしているのである。

ー結びに代えてー

上記のコーアン教授による連続講義の内容は、教授の用意したレジュメと筆者の講義ノートをもとに、後述の参考文献で発言の歴

史的背景等を確認しながらまとめたものであり、文責はすべて筆者にある。史実の日本語訳に関しては、「アメリカ現代史」(斉藤真著、山川出版社)を参考にした。

最初に述べた通り、コーアン教授はスライドを多用して、象徴的国家として誕生した「アメリカ」の視覚的インパクトを効果的に解説された。そうしたイメージリの存在がないままに講義内容をまとめるのは困難なことであったが、可能な限り視覚的シンボルとして用いられた事物の解説も加えることも試みた。

その建国の経緯から見ても、合衆国が国家および国民の統合のために強力なシンボルを必要としたのは理解に難くない。2世紀を経た今、合衆国は内からも外からも大きな変革の圧力にさらされてなお、時代と共に変容しつつもその根底に We the People の理念を体現化するシンボルを必要とし続けているのである。

最後に、American Experience のアジア・太平洋の側面にスポットを当てようとするアジア太平洋交流センターのフォーラムは参加者全員に多くの incentive を与えるものであり、機会を与えていただいたアメリカ学会およびアメリカ研究振興会に心より感謝の意を表したい。

参考文献

Crevecoeur, Michel-Guillaume-Jean de, *Letters from an American Farmer*, (1985) Concise Anthology of American Literature, 2nd Ed. 186 - 199, Macmillan, N.Y.

Douglass, Frederick, (1986) *Narrative of the Life of Frederick Douglass, An American Slave*, Penguin Classics, Penguin Books USA, N.Y.

Luedtke, Luther S., ed., (1987) *Mak-*

ing America : The Society and Culture of the United States, United States Information Agency, Wash. D.C.

Mann, Arthur,(1979) *The One and the Many : Reflections on the American Identity*, the University of Chicago Press, Chicago.

Tocqueville, Alexis de, (1981) *Democracy in America*, Modern Library College Edition, Random House, N.Y.

The Constitution of the United States of America,(1987) United States Information Service, American Embassy, Tokyo.